

1 主題設定の理由

(1) 生徒が生きる未来

第3期教育振興基本計画では、2030年以降の社会を展望した教育政策の重点事項として次の点を挙げている。

- ① 個人では自立した人間として、主体的に判断し、多様な人々と協働しながら新たな価値を創造する人材の育成を図る。
- ② 社会では一人一人が活躍し、豊かで安心して暮らせる社会の実現、社会（地域・国・世界）の持続的な成長・発展を目指す。

また、「超スマート社会（society 5.0）」の実現に向けた技術革新が進展する中「人生100年時代」を豊かに生きていくために、若年期の教育、生涯に渡る学習能力向上が必要であると述べている。さらに教育を通じて生涯にわたる一人一人の「可能性」と「チャンス」を最大化することを今後の教育政策の中心に据えて取り組むこととしている。

では、society 5.0を生きることになる現在の中学生に必要な資質・能力どのようなものか。新学習指導要領では、国語において育成することを目指す資質・能力を「国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力」とし、国語で理解し表現する言語能力を育成する教科であることを示している。

また、答申別紙において言語能力を構成する資質・能力を「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」の三つの柱に沿って整理したものとして、以下のように示している。

（知識・技能）

言葉の働きや役割に関する理解、言葉の特徴やきまりに関する理解と使い分け、言葉の使い方に関する理解と使い分け、言語文化に関する理解、既有知識（教科に関する知識、一般常識、社会的規範等）に関する理解が挙げられる。

特に、「言葉の働きや役割に関する理解」は、自分が用いる言葉に対するメタ認知に関わることであり、言語能力を向上する上で重要な要素である。

（思考力・判断力・表現力等）

テキスト（情報）を理解したり、文章や発話により表現したりするための力として、情報を多面的・多角的に精査し構造化する力、言葉によって感じたり想像したりする力、感情や想像を言葉にする力、言葉を通じて伝え合う力、構成・表現形式を評価する力、考えを形成し深める力が挙げられる。

（学びに向かう力・人間性等）

言葉を通じて、社会や文化を創造しようとする態度、自分のものの見方や考え方を広げ深めようとする態度、集団としての考えを発展・深化させようとする態度、心を豊かにしようとする態度、自己や他者を尊重しようとする態度、自分の感情をコントロールして学びに向かう態度、言語文化の担い手としての自覚が挙げられる。

これらは、新学習指導要領国語科の領域、指導事項の構成に反映されており、未来社会を支える人材として必要な資質・能力が、新たに「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力、人間性」として示されている。

中でも、「学びに向かう力」については、従来、国語への関心・意欲・態度とされた部分だが、「積極的」に学習に取り組む態度ではなく、自らの学びを実現していく「主体的な」学び手としての能力を育成することを目指している。

一方、周知のとおり、今年度は4月当初より新型コロナウイルス感染症の世界的な流行に伴い、世界は大きく変化している。人々の心身の健康状態の悪化、経済的損失、人間関係の喪失等、深刻な状況は、依然として継続している。流行は、まだまだ終息する状況ではなく、今後もいつになったら以前のような生活が送れるのか見通しが立たない状況である。

学校においても生徒の安全健康を第一とした運営が進められ、従来のような濃密なコミュニケーションを前提とした学習を行うことはできていない。今後の状況の変化にもよるが、今置かれた状況の中で、従来のコミュニケーション方法を改善したり、新たなコミュニケーション手段を見いだしたりしながら、生徒の学びを保障していくことが求められている。

国語科教育においても、従来のコミュニケーション活動を重視した言語活動の充実に加えて、例えば本校が6月に導入したクラウド型コンピューティングシステム「Google work space」や、双方向会議ソフト「ZOOM」等を導入し、対面しなくても学ぶことができるオンラインを活用した学び等、新しい学びを実現していかなければならない状況である。

(2) 前研究の成果と課題

本校国語科では、昨年度までの3年間、「言葉に対する捉え方を更新していく授業の創造」を主題として研究を行ってきた。

本校生徒は、与えられた課題や活動に対して意欲的に取り組む生徒が多く、国語科においては、特に対話を通して自己の考えを広げたり深めたりすることの有用性を見出し、積極的に話し合いを行おうとしていることから、研究の成果は挙がっていると判断している。具体的には、成果として次のような点を挙げるができる。

○「学習課題設定の工夫」「言語活動設定の工夫」「交流の活性化」の3点について生徒が言葉を捉え直す「更新」が行われていたことに一定の成果が見られた。

○ノート、ポートフォリオを用いた思考等の可視化を実現できた。

○振り返りシートの活用によって思考の深化を進めることができた。

一方、課題については、昨年度研究の集約で、

▲「主体的に学習に取り組む態度」の評価に関し、「粘り強さ」・「学習調整力」をどのように見とり評価に繋げていくか、内容と方法が開発されていない。」

としている。来年度には新学習指導要領が全面実施となることから、その評価の内容や方法の開発については、まさに今年度末までの全国的な課題であると考えられる。

加えて、全国学力・学習状況調査は今年度実施されなかったが、本校独自に行った質問紙調査の結果において、次のように「学校での学び」と「実生活で生かされる力」の結びつきが弱い、という結果も出ている。

・「国語の勉強は大切だと思いますか。」に「当てはまる」と答えた生徒が55.3%であった。

・「国語の授業で学習したことを、普段の生活の中で、話したり聞いたり書いたり読んだりするときに活用しようとしていますか。」に「当てはまる」と答えた生徒の割合は34.9%であった。

これらのことから、

① これまで培ってきた言葉によって交流し、自分の考えを更新し、新しい問いを持って学びを進めていこうとすることによって、知を更新していく「知識・技能、思考力等、意欲等」(共有する力)にさらに磨きをかけ、未来を創造する知の産出方法を身に付けさせること。

② 国語科における学びに向かう意欲を活性化させ、自己調整を行いながら、粘り強く学び続ける担い手を育てること。

という2点の課題を新研究の出発点に据えることとした。

2 本校国語科が求める方向性と研究内容

前年度までの成果と課題を踏まえ、次のような取組を通して言語能力の定着と充実を図り、もって未来の創造と学びに向かう力の育成につなげたい。

(1) 言葉の捉え方を更新する授業の定着と充実

- ① 言葉によって未来を切り拓く力をつけるため、強い目的意識を持てる課題解決的な単元を開発する。また、その学習過程の中に、知識や技能を自在に駆使し、力を発揮できる場を設定する。

これまでも小グループによる意見交換の有用性は周知されているところであり、生徒達は積極的に交流を行い、言葉を更新していく様子も見られることから、一定の成果が上がってきていると判断している。しかし、これからは、新学習指導要領で育成を目指す資質・能力の観点から、より目的意識を持ち、他者と協働して課題を解決することができる言葉の力や、自らの学びの姿を見直して、学びの質を高めることができる力が求められている。

具体的には、まず、生徒が主体的に考え、動き出したいくなるような、生徒の生活の文脈に近く切実な判断や対応が必要となる課題や、知的好奇心を刺激することができる課題を設定したい。さらに、この課題は、学習者自身と他者が、それぞれに持つ知識や経験を引き出し合うことで解決していく必要があるもの、つまり、協働を通じた解決が必要となるものとし、国語科でこれまでも積極的に取り入れてきたワールド・カフェやジグソー学習などをさらに深い学びにつなげるものとした。また、その方法的良さに気づき、課題解決のために自在に用いることにもつなげていきたいと考えている。

加えて、新たに導入するGoogle work spaceのようなテクノロジーの力を活用して、教師と生徒がこれらの学びの過程をともにモニターし、それぞれの「粘り強く取り組む姿」や「学習調整を行う姿」を伸ばしていく「学びの最適化」も図っていききたいと考える。そして、これらを、これまで研究の重点としてきた「学びを通して学習者が、自身の言葉の認識を更新していくこと」にも生かすことで、学びは一層重層的なものとなり、生徒が自身の未来を切り拓くことができる言葉の力を身に付けることにつながると考えている。

- ②Google work space上に語彙を蓄積することによって、豊かで洗練された語彙の獲得を目指す。

言葉の捉え方を更新していくために、豊かで洗練された語彙の獲得は必要不可欠である。

Google work spaceを利用した語彙学習を積極的に活用し、振り返りがすぐに行えるように自分のクラウド上に語彙を書き留めていくようにしていきたい。討論会やビブリオバトルなどを開催し、新たな言葉を積極的に取り入れていく方法を実践し、「Word Bank」として生活の様々な場面で得た新しい言葉を蓄積していくようにしていきたい。

まず蓄積するときに、どのような言葉なのかを辞書で調べ、感情を表す言葉や、動作を表す言葉など意味を分類して保存していくことにより、言葉の意味だけを理解し、蓄積していただくだけではなく、自分の言葉として使えるものにしていきたい。さらに授業や日常の中で単独で獲得していく言葉と、作品の中で出会う言葉を整理し、どのような場面で使うことができる言葉なのかをGoogle work space上で紹介するなど、獲得したもの同士をつなげたり、関連させたりすることにより、日常の授業や生活の中でも使う練習を行っていく。

例；Google work spaceを利用した語彙学習，Word Bankの作成と積み上げ，ビブリオバトル等の実施

(2) 言葉の主体的な学び手育成を目指す学びのデザインの開発
 《主体的な学びのプロセスモデル国語編》

学びのプロセスモデル国語編							
	見通し		学習活動				振り返り
	①目標設定	②方略計画	③遂行	④形成的評価	⑤方略調整	⑥遂行	⑦総括的評価
エンゲージメント	<ul style="list-style-type: none"> ・高いレベルの関心をもつ課題や日常生活で直面する課題、現実世界で解決すべき課題、自らのキャリア形成に関連する課題を選択する。(認知・行動) ・挑戦の感覚、知的好奇心、学習への期待感をもつ。(感情) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ゴールを設定し、課題解決のための学習方略を考える。(認知) ・過去の学習経験を生かそうとする。(認知) 	<ul style="list-style-type: none"> ・計画に基づいて、学習を遂行する。(認知) ・個人やグループでの学習活動に熱心に参加する。(行動) 	<ul style="list-style-type: none"> ・自らの学びの効果を振り返る。(認知) ・自らの学習方略を調整する。(行動) 	<ul style="list-style-type: none"> ・必要に応じて学習方略を修正する。(認知) ・学習の進み具合を把握し、見通しをもつ。(認知・行動) 	<ul style="list-style-type: none"> ・計画に基づいて、学習を遂行する。(認知) ・調整された学習方略に基づき、個人やグループでの学習活動に熱心に参加する。(行動) 	<ul style="list-style-type: none"> ・自らの学びの質や成果を振り返る。(認知・行動) ・学ぶ面白さや楽しさを感じる。(感情) ・有能感や充実感をもつ。(感情)

① 言葉の主体的な学び手の育成

(1) 自己調整力の育成

生徒が主体的に言葉を探求していくためには、自分の学びがどれくらいうまく進んでいるのかを振り返り、調整する「メタ認知」が必要である。目標設定の場面ではまずどのような目標を設定し、方略計画を立てていくが、そこには課題への興味が第一である。そこで本校国語科では学びのデザインとして、単元やつけさせたい力に応じてどのような言語活動を設定し、上の表に当てはめてどのような見通しを持って学習者に「自らが動き出したくなる課題」を設定し、教師が「学びのプロセスモデル」を意識して計画と遂行していく必要がある。また学習活動を行っている際に形成的評価と方略調整を行うことによって、遂行のコントロールを行う「自己調整」が必要となる。そこで指導者は学習過程の中に待つ時間を生み出し、生徒自身に再計画の時間を保証することを試みたいと考える。また仲間との交流によって自分の学びの達成度や、現状を把握して、問題点をメタ認知しその方略を修正することによって、見通しからの再計画を行う。さらにその計画を遂行し、最後に自己省察によって目標を達成できたかということを総括的評価するというサイクルを作ることによって、主体的な学びを実現させたい。

(2) 粘り強い取組を行う力の育成

主体的な学びのもう一つの側面は粘り強さである。学習調整と一体となって現れることもあるが、授業内の発言や活動の見とりだけでは不十分である。そこで記述したもの必ず単元の中で毎時間の学習を振り返る時間を作り、「振り返りシート」や「ポートフォリオ」に記述させることを通して、その側面を見とりたい。学習の課題に対し諦めずに何度も取り組もうとしているかどうか、また自己調整を行った後にさらに課題に取り組もうとする姿勢が見られるかどうか。学習後にも、その単元の目標に対して出した自己の課題を次の学習に生かすことができるような記述ができたか、努力の過程とその頻度を見とりたい。

3 研究を支える取り組み

(1) SELF（総合的な学習の時間）との関わり

本校では、「総合的な学習の時間」における探究的な学習についても研究を重ねている。1年生から3年生まで、探究的な学習を系統的に配置し、発達段階に応じたカリキュラムを組み、最終的には生徒個人で探究できるだけの力をもつことを目標に、全職員で指導に当たっている。その過程の中で、総合的な学習の時間において生徒に身に付けさせたい資質・能力として挙げている「課題設定能力」「情報収集能力」「情報選択（分析）能力」「表現力」「自己省察力」を、各教科との連携を図りながら身に付けさせるため、教科横断的な学習を意識した年間指導計画を作成している。国語科においても、国語科で身に付けた資質・能力を総合的な学習の時間で活用できるように、また、総合的な学習の時間で身に付けた力を国語科の授業においても活用できるように、関連性を図りながら授業を展開することを意識している。

(2) ファシリテーションスキルとFUZOKUワークシート

今年度の国語科の研究では、生徒に“言葉で世界を認識する力”、“ファシリテーションスキル”を身に付けさせることを目標としている。まず、“言葉で世界を認識する力”を育むため、「語句・語彙力」の育成を目指す。本校ではこれまで、言語感覚を働かせることの有用性を生徒が感じるため、また意識的に言葉と関わる態度を育てるために、言葉の価値や実生活における有用感に気付かせるところから始めるため、全学年を通し、新聞記事を活用した「FUZOKUワークシート」の作成と活用に取り組んできた。学校における授業のみでなく社会的な事象と自分自身の考えを交差させる場面を作ることで、より豊かな言語感覚を養うことにつながると考える。本年度は特に、「言葉」の力の基盤である語句・語彙力を育むため、生徒が新しい時代に生まれた新しい言葉や、出会ったことのない言葉に注目し使いこなしていくことを目指し、語彙の獲得を意識した問題作成を心がけている。新聞記事の内容については、文学的な内容、社会的な内容、理科学的な内容など幅広く取り上げ、新たな語彙を「Word Bank」に蓄積するなど全学年、全教科での学びを支える土台作りを目指していく。

次に“ファシリテーションスキル”では特に、「対話」の質を向上させていきたい。コミュニケーションの方法が多様化していく社会の中で、新しいファシリテートの力が求められている。ただ意見交流を行うのではなく、交流の目的を意識させること、相手の意見を受容するだけでなく建設的な話し合いとなるように問い返したりすること、目的を果たすために誰のどの意見が有効であったか意識すること、どのようなまとめ方をすれば良いのかを工夫すること等、生徒が意識できるような対話を目指したい。

【 参考文献 】

文部科学省 中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 国語編 2018

文部科学省 国立教育政策研究所「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 2020

山梨大学教育学部附属中学校 研究紀要 2017-2019

鹿毛雅治『学習意欲の理論』金子書房 2013

鹿毛雅治『授業という営み——子どもとともに「主体的に学ぶ場」を創る』教育出版 2019

第3期教育振興基本計画 2018